

NEWSLETTER

ハマ発ニュースレター

横浜都市発展記念館館報●第21号

【特集】

昭和の東京開港と横浜 特別展「港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜」より



21
2014年1月
ご自由に
お持ちください

【展示余話 其の一】

横浜市が記録した震災と復興

【展示余話 其の二】

子どもたちが見た「関東大震災と横浜」



横浜都市発展記念館

ハマ発NEWSLETTER 第21号 2014(平成26)年1月25日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市ふるさと歴史財団 〒231-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
基本デザイン/高橋健介 印刷・製本/ツルミ印刷株式会社 本誌からの無断転載を禁止します。

●表紙図版 我等の東京港 (絵葉書 部分) 昭和初期 当館蔵

EXHIBITION

特別展のご案内

開館10周年記念特別展

「港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜」



東京が港を開くか開かずか、港を建設するか否か…。東京が港とどう関わるかということによって、横浜はつねに影響を受けながら都市を発展させてきました。港をめぐる横浜と東京の動きを横浜開港(1859年)から東京開港(1941年)までたどりながら、ふたつの港の歴史的風景を紹介します。

【会期】2014(平成26)年1月25日(土)～4月13日(日)
*会期中の再入館は1回まで無料です。

【関連展示】写真パネル展「高度成長期 横浜の港」
2014年2月1日(土)～4月13日(日) ※観覧無料

【関連出版物】『港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜』
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編

NEWS

中庭が新しく生まれ変わりました！

このたび株式会社三陽物産からの寄付金をもとに中庭の整備をおこない、市内で出土した横浜市瓦斯局と神奈川台場の遺構をあらたに屋外展示に加えました。四季折々の花が咲く憩いの場所として、また横浜の歴史に触れる散策のスタート地点として、是非ご利用ください。ご寄付をいただいた同社代表取締役の山本博士様、神奈川台場の石をご提供くださった株式会社栄光代表取締役の朝日恒男様には心より御礼申し上げます。



寄贈資料の紹介

平成25年7月から12月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
横浜大空襲直後の市内写真	12	中川智仁
雑誌『LIFE』1945年12月24日号	1	中川智仁
オデラン座ウィークリー	117	廣嶋佑治
第9代横浜市長渡辺勝三郎旧蔵の眞葛焼花瓶	1	渡辺勝彦

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物
『関東大震災90年記念 関東大震災と横浜』

横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編
横浜市史資料室/協力
定価1200円(税込)

『目で見る「都市横浜」のあゆみ』

横浜都市発展記念館/編 定価1300円(税込)

DVD
「映像でたどる昭和の横浜」シリーズ

第1巻・港とまちづくり 第2巻・都市の交通 第3巻・子どもたち
定価各1500円(税込)



関東大震災と横浜

※上記価格は全て平成26年1月現在のものです。

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館します。)

■入館料

上記特別展開催期間

特別展 一般300円 小・中学生150円
(特別展の入館券で常設展もご覧いただけます。)
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

それ以外の期間

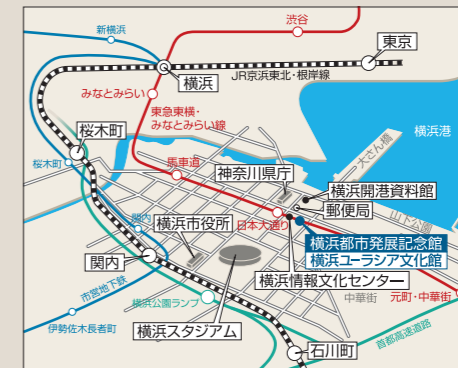
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

●毎週土曜日は小・中・高校生無料

●「濱ともカード」「敬老特別乗車証」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅南口」下車徒歩1分
- あかいくつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記

周囲の大いなる心配をよそに、開館10年目にして初めて編集担当を務めました。関東大震災90周年の連携展示が終了し、いよいよ開館10周年記念特別展の第3弾「港をめぐる二都物語」が始まります。横浜港の歴史を<東京・横浜>という二つの都市の相関関係から読み解く、新しい切り口の展覧会です。皆様のご来館をお待ちしております。(青)

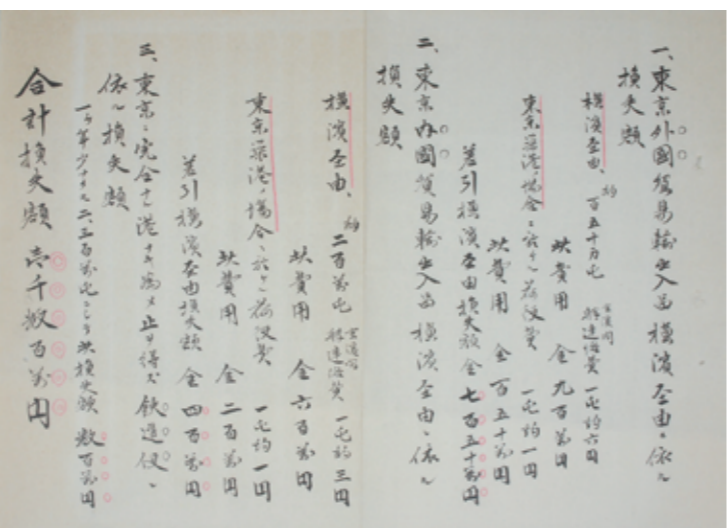
◎次号発行予定 平成26年7月頃

昭和の東京開港と横浜

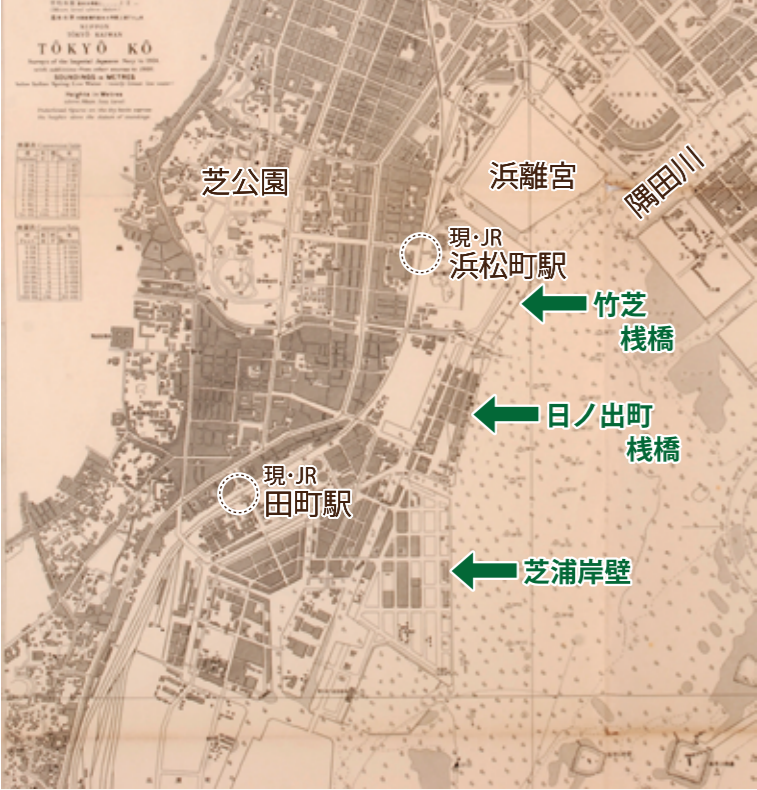
特別展「港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜」より



②東京港の絵葉書 昭和初期 当館蔵



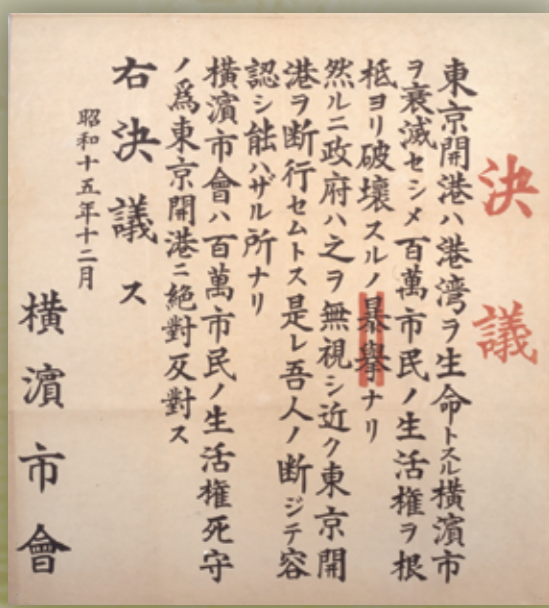
①渋沢栄一宛堀光亀書簡 「帝都復興審議会書類」 大正13年11月25日 渋沢史料館蔵



③東京港(雑用海図) 昭和12年 当館蔵



④東京開港絶対反対の横断幕が貼られた横浜市電(弘明寺) 昭和15年 中野武正氏撮影・蔵



⑤東京開港反対の「決議」 昭和15年12月 山室宗作氏蔵

山室家は神奈川県六角橋の旧家で、昭和初期に横浜市議員をつとめた。

安政6(1859)年の横浜開港はひろく知られているが、東京の開港が昭和16(1941)年によりやく実現したことを知るひとは今ではあまりいないだろう。しかし、東京開港はその当時、横浜の「衰滅」をかけた大問題であった。戦前の横浜は国際貿易によって立つ都市だったが、実は東京も港―港湾設備と外国貿易―を欲していた。そして東京側のこの港に対する欲望は横浜に大きな衝撃をあたえたのである。ここでは、展示資料の紹介をかねて、昭和はじめの東京開港問題の経緯と横浜の反対運動をふりかえってみよう。

■東京築港の背景

東京の築港計画は明治時代から存在したが、横浜築港にくらべてはるかに高額になる工事費用や、横浜側の猛反対もあつてなかなか実現をみなかった。そのため、東京は長らく本格的な港湾設備を持たず、物資は横浜で船に積み替えられて東京まで運ばれていたの

ある。しかし、関東大震災後の都市の復興プランを検討するなかで、東京築港がふたたび議論されるようになった。また、東京商科大学(現一橋大学)教授の堀光亀は、大正13(1924)年帝都復興審議会委員・渋沢栄一に「復興事業中少ナクトモ東京築港丈ハ必要欠クベカラズ」と主張する書簡を送っている。堀の試算によれば、船による京浜間の運送経費は外国貿易の場合で1トンあたり約6円かかる。しかし、東京に築港すれば経費は1トンあたり約1円と大幅に減少するという①。

京浜間の運送経費は海外からのそれにくらべてもかなり高額だった。たとえば金物1トンあたりのサンフランシスコ―横浜間の運賃が10円であるのに対し京浜間だけで8円もかかっていた(時事新報「昭和5年3月7日」)。東京側が築港を望む理由のひとつに京浜間のこの運送経費の問題があった。

トスル横浜市ヲ衰滅セシメ百万市民ノ生活権ヲ根柢ヨリ破壊スルノ暴挙ナリ」との決議文を発表した⑤。東京開港は国際貿易に依存する都市横浜にとってまさに死活問題であったのである。

長谷川時雨の小説『東京開港』(昭和22年)には、「海から見ると、横浜港だ、東京港だなんていつてのせまいわね」と登場人物が語るシーンがある。案外、当事者以外の庶民は、横浜と東京の港をめぐる抗争など視野の狭いことだと冷静に見ていたのかもしれない。

そして、大正・昭和期に東京が工業生産都市に変貌し、京浜間の輸送量が增大していたことも、東京築港の必要性を切実なものにしたのである。

■横浜の反対運動

東京築港論を背景に昭和初期に東京市は港湾施設を着々と整備していく②。大正14年、日ノ出町棧橋が震災後の応急的な施設として完成。昭和7年にはその南に芝浦岸壁が築造され、6000トン級の船舶を7隻同時に繋留できるようにになった。さらに、昭和9年には竹芝棧橋が竣工し、戦前東京の3埠頭が姿をあらわした③。

東京築港の動きに対し、横浜は一大反対運動をくりひろげる。昭和7年、臨時横浜港湾委員会はその陳情書で「東京湾内ノ極メテ近接セル個所ニ今東京港ノ併立スルのは「国家経済上ヨリハ二重投資」と非難した(東京築港二関スル陳情書」当館蔵)。反対運動は市

東京港が横浜港と統合し「京浜港」として開港するのは、太平洋戦争に突入する直前、昭和16年5月20日のことである。(吉崎 雅規)

余話 展示

其の一

横浜市が記録した震災と復興 （元職員の手元に残された震災写真）



① 寄贈された写真

東大震災関係写真をご寄贈いただいた。写真は佐藤氏の父親にあたる佐藤穀氏（元横浜市建設局道路課勤務）の手元に残されていたもので、その内容は、震災直後の被災状況から復興工事が進む市街地の様子まで、多岐に渡るものであった。

関東大震災から90年目を迎えた昨年（平成25年）は、神奈川県内の多くの博物館・資料館で震災と復興をテーマとした展覧会が企画されたが、当館では、横浜開港資料館・横浜市史資料室との連携展示として、特別展「関東大震災と横浜」を開催した。

この展示準備の過程で、長野県安曇野市在住の佐藤寛氏から394点におよぶ関

東大震災関係写真を紹介することはできなかったが、横浜に関する写真がまとまって残されていた点で非常に貴重であり、また未見の写真も多く含まれていたことから、会期中中にミニコーナー「横浜市が記録した震災と復興」を新設して公開した。以下にその一部を紹介しておきたい。

■煙を上げる横浜市庁舎

明治44（1911）年に完成した煉瓦造の横浜市庁舎は、煉瓦壁に鉄材を埋め込むという耐震構法が採用されていたこともあって、地震の揺れではびくともしなかった。地震直後には被災者も庁舎内に避難してきていたが、やがて周囲で発生した火災の炎が屋上の塔から侵入し、建物は煉瓦の壁だけを残して焼け落ちてしまう。壁だけの姿となった市庁

舎は、その後の復旧作業に支障が出るとの理由で、震災から一ヶ月が過ぎた10月15日に陸軍工兵隊によって爆破解体される。②はその瞬間を捉えたものである。炎上する横浜市の絵葉書はよく知られているが、それらは炎を後から着色したものであるから、実際に煙を上げている写真となると爆破の瞬間しかないであろう。この写真が入っていた封筒「市役所区役所」には、爆破後の瓦礫の上で撮影された写真も含まれている(③)。

■各地からの救援

地震によって人々の生活を支えるライフラインは壊滅的な被害を受けた。横浜市の水道施設も大きな打撃を受けており、飲料水の確保は急務の問題であった。地震で破断した水道管の復旧作業には、陸軍以外にも関西の各

市から派遣された救援団が加わった。

④は、大阪市水道部から派遣された救援団の集合写真である。『横浜復興誌』第4編によると、大阪市からは9月14日から11月9日にかけて計39名が派遣され、主要配水幹線の修理にあたっている。建物の連続アーチと奥に見える階段の位置から判断すると、撮影場所は被災した二代目横浜駅であろう。『横浜復興誌』などには掲載されていない貴重な写真である。



② 煙を上げる横浜市庁舎



③ 横浜市庁舎の残骸



④ 大阪市水道部からの救援団

■復興なった横浜市街地

⑤は、山手の丘（地藏坂上）から撮影された4枚続きのパノラマ写真である。復興をとげた横浜の市街地を撮影したもので、かつての吉田新田にあたる関東地区が眼下に広がっている。右端に見えるのは、フェリス和英女学校（現・フェリス学院中学校・高等学校）の1号館。中央には横浜公園球場や横浜小学校、神奈川県庁舎などの復興建築の姿が見え、左手には伊勢佐木町の街並みが確認できる。昭和6

（1931）年5月に8階建ての店舗を新築した越前屋が写っていることから、それ以降の撮影と判断できる。

この写真が入っていた封筒「鳥瞰」には、同時期の撮影とみられる野毛山からのパノラマ写真も含まれている。こちらも同じく4枚続きのパノラマだが、右端の1枚をのぞいた3枚が『横浜復興誌』第4編の巻頭に掲載されている。同書の発行が昭和7年ということ考えると、これらのパノラマ写真はその製作準備として撮影された

ものではないだろうか。

以上、佐藤穀氏旧蔵写真のなかから一部を紹介した。写真群にはまだまだ興味深いものが含まれており、それらを含めた資料の概要紹介は稿をあらためたい。最後に、貴重な資料をご寄贈くださった佐藤寛氏はじめ佐藤家の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

（青木祐介）

⑤ 山手からのパノラマ

吉田小学校 越前屋 野澤屋 松屋 横浜公園球場 神奈川県庁 横浜小学校 同潤会アパート

フェリス和英女学校 1号館



余話 展示

子どもたちが見た「関東大震災と横浜」



特別展「関東大震災と横浜」の開催にあたっては、会期が丸まる夏休みを挟んでいたことから、子どもたちにも各施設の展示内容に親しんでもらえるよう、当館・横浜開港資料館・横浜市史資料室の3館連携で、小学生を対象としたクイズ形式のワークシート「関東大震災博士になろう！」を作成しました。

その他、当館での試みとして、展示を見学した子どもたちに短い感想文を書いてもらうよう声をかけ、集まった感想文はその都度展示室前のスペースに掲示して、来館者の方にも読んでもらえるようにしました。8月中旬から会期終了までのおよそ2カ月間で、市内の小学生を中心に計101人の感想文が集まりました。

多くの子どもの記憶には、2年前の「3・11」が強く残っています。集まった感想文からは、東日本大震災という比較対象を得て、子どもたちが90年前の関東大震災をより身近で現実的な災害の問題として受け止めていることがうかがえました。ここではその中から、印象に残ったものをいくつか抜粋して紹介したいと思います。

かんそうぶん 感想文
震災の前までは、たかさんの家が町にはあったけれど、火災でほとんどの家やたて物が焼けてしまった写真を見てかなしくなりました。外国の人々がたすけてくれたことも知りました。
(小3)

かんそうぶん 感想文
わたしは、東日本大しん災があったとき、体験したことがないぐらい大きな地しんに、とてもこわくなりました。昔の人々も同じぐらい、または、もっともつこわい思いをしたと思います。だからいまから備えが必要だと思います。
(小5)

かんそうぶん 感想文
ぼくは、見学して、地しんは、こわいと思います。でも人間は、ふつつする力をもっているの、すごいと思いました。だから、今のように平和なくらしができると思います。ぼくは、まんがいち地しんがおきた時は、ちいきのみんなと、きょうりよくし合います。
(小4)

かんそうぶん 感想文
きょうはじめて、9/1にひなんくんれんをするり(ゆう? - 当館注)がわかりました。大きいじしんがきたら、こんなにこわいことがおこることもはじめてしりました。
(小1)



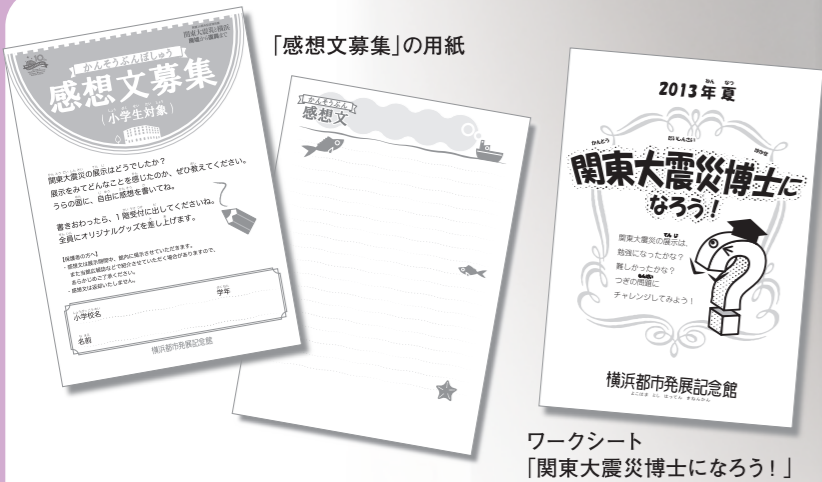
かんそうぶん 感想文
今じしんとかじがあつたらぼくのおうちは、もえてものがこわれてしまうかもしれせん。いつくるかふわんです。
(小2)

かんそうぶん 感想文
じしんは、すごくこわいと思います。3月11日に起きたじしんでは神奈川はまだつよくはなかつたけれどすごくこわかったです。それよりも関東大震災はもっとつよいと思うとすごくこわいです。写真などを見ると血まみれでたおれている人やがれきの中を歩いている人の絵があつたし、じしん前とじしん後の写真がありました。じしんはいつおこるかわからないけれどみんなで協力すれば早くふつこうに近づけると思います。
(小6)

かんそうぶん 感想文
私が関東大震災の展示物の中で一番印象的だったのは11時58分止まった時計です。地震が起こった時、止まってしまったその時計は、その時のまま時が止まってしまっているようで地震のこわさがよくわかりました。また、90年前の横浜と今の横浜では何もかもが変わっていて震災からの復興の早さにおどろきました。そして、外国からの支えん物資を見て、外国との協力の力が伝わりました。
(小6)

かんそうぶん 感想文
私は、関東大震災のことをあまり知らなかつたので、とても勉強になりました。思っていたよりもはげしがつたので少しこわかつたです。また、東日本大震災の後、2年半くらいたつてもふつこうしてなかつたりするの、関東大震災は、5年だけたくさん建物がたつていたので、すごいなと思いました。「地震はこわいな」と改めて思い、備えが必要だなと思いました。
(小5)

かんそうぶん 感想文
私は、はじめて「かん東大しんさい」のことをしりました。一番おどろいたのがじしんのひがいもすごいけど火じのほうもつすごいということです。地図をみると火がもえうつつて火がついたところがほとんどでした。私海が近いところだとつなみがくると思つたの、そうではなく火じのほうが多かつたのには、びっくりしました。そしてほかの国の人ややさしいと思いました。自分の国じゃないのに、たすけたから早くもとの町にもどつたと思いました。もし日本いがいでじしんがおきたらぼきんなどをしたすけてあげたいです。
(小4)



ワークシート「関東大震災博士になろう！」

「感想文募集」の用紙